

模写制作から検証する油彩画の構造

大阪芸術大学 大学院 嘱託助手 中村 彰吾

本研究は、油彩画における古典技法の研究である。近年、科学技術の発達により非接触調査法が格段に向上し、これまでの実見分析や微細な絵具サンプルなどから推測されてきた絵画技法は、絵画の層構造や絵具の材料に至るまで、より精細な分析が可能となってきた。本研究の目的は、従来の絵画技法の研究と科学調査による新たに発見された研究成果に基づき、実際に模写制作を行うことであるが、画面の表層だけでなく材料を含む油彩画の構造を模写制作から検証することである。

今回の模写制作に選定した作品は、ベラスケス(Diego Velázquez, 1599-1660)の《男の肖像、あるいは自画像》(1635年)である。その他に『Heritage Science』やロンドン・ナショナル・ギャラリーの発刊する『National Gallery Technical Bulletin』、その他美術館の調査報告など翻訳作業を行う中でヨハネス・フェルメール(Johannes Vermeer, 1632-1675)《真珠の耳飾りの少女》やアンソニー・ヴァン・ダイク(Anthony van Dyck, 1599-1641)の作品など幾つかの候補があったが、本作の模写を行う理由は大阪市立美術館において開催されたメトロポリタン美術館展(2021.11.13-1.16)で、実際に何度も入館し実見分析することができたからだ。またベラスケスの作品は模写制作を行うのに十分に科学調査が進んでいること、グリザイユ層が描かれている可能性が高いことから本研究の対象となった。

まず《男の肖像、あるいは自画像》は、多くの変遷を経てベラスケスの帰属となった。この絵画は1854年に英国のコレクター兼愛好家のヒュー・キャンベル卿が作品を見て、最初にベラスケスによるものと識別するまで、当初ヴァン・ダイク作とされた。後年の劣悪な修復により、一度はベラスケス工房関連の作品にまで降格されたが、《男の肖像、あるいは自画像》は2009年に行われたマイケル・ギヤラガーの修復により再びベラスケスの帰属の作品となる。その結果、この絵画を最初に研究したアウグスト・メイヤーが言及する「シルバーグレイの美しい画面をしている」という特質が復活することとなる。おそらく、当初ヴァン・ダイク作とされたのも、このシルバーグレイの美しい特質によるものであろう。ヴァン・ダイクも多くの作品をグリザイユ技法で独特の寒色帯びた肌色の作品を描いているからだ。

では、この絵画はどのように描かれたのだろうか。イェール大学が出版する『Velázquez THE TECHNIQUE OF GENIUS』(1998)によると、ベラスケスの使用する絵具の顔料は限られたものであったことが分かっている。下記が

そのリストである。

単色は、白：鉛白、方解石(木灰から得られたもの)、黄：酸化鉄(黄)、錫-鉛-黄、ナポリ黄、橙：酸化鉄(橙)、朱銀、赤：酸化鉄(赤)、朱銀、有機レッドレーキ、青：アズライト、ラピスラズリ、スマルト、茶：酸化鉄(茶)、マンガニウムオキシド、黒：動物性または植物性の黒、混色は、緑：アズライト、酸化鉄、錫-鉛-黄、紫：有機レッドレーキ、アズライトである。ベラスケスの使用した顔料は、この時代によく使われた材料であることが分かっているが、特出すべき点は方解石を用いたことが挙げられる。この方解石は、木灰を洗浄して得られた物だと2014年のプラド美術館の研究で判明した。方解石は、絵具と混ぜると透明性と流動性を調整することができる。現代で言うところの体質顔料(色調や量感の調整を行う顔料)の役割を果たす。巨匠の時代の油絵具は、顔料と乾性油(時折に樹脂の添加)のみで作られると言われるが、ベラスケスの厚みと透明感のある画面の秘密は、この方解石にあると言えるだろう。確かに単一顔料で練られた油絵具は並はずれた発色力を持つ。しかし、厚塗りなどの盛り上げを行うと不透明になり、下層を隠蔽してしまう。このベラスケスの油絵具は、ある程度であるが下層を透過しながら厚塗りができる点が厚みのある透明感を実現している。その他の詳細は、「研究成果作品」の報告書に記載する。

これらの顔料の中から、入手できるものは顔料を揃え、入手できなかったものは、組成の近い顔料から油絵具を自作し、模写を行なった。まず、キャンバスへの地塗りは、赤土をメインに少量の黄土、茶色、黒、鉛白で色調を整えたものを施した。メイトとマリアの共著「VELÁZQUEZ AND HIS CHOICE OF PREPARATORY LAYERS: DIFFERENT PLACE, DIFFERENT COLOUR?」(2019)によると、ベラスケスは自身のキャリアの中で何度か地塗りの色を変更したことが分かっている。この自画像は1635年にマドリッドで制作された時期の褐色の地塗りと一致する。次に黒に少量のスマルトを混ぜた油絵具で素描し、ライトグレーの背景で人物像の輪郭を柔らかく定め、顔や胴体をグリザイユでインパストしながら形を描きこんだ。その後、方解石を混ぜ込んだ油絵具で彩色をした。方解石を混ぜたことで油絵具をある程度厚く塗っても下層のグリザイユを活かし描くことができ、ベラスケスのような重厚感のある塗りに仕上がった。今後、自主制作においても実験を繰り返していく。